

「ローマ法王祝電」と米領フィリピンの独立承認

判澤 純太*

(平成22年10月29日受理)

On a Congratulatory Telegram by the Pope to the Independence of the Americans' Domain Philippines

Junta HANZAWA*

The united nations was associated after the Asia-Pacific war ended. In spite that, in almost all areas in Asia and Africa, then the nations started their wars seeking for national independence one after another. Isn't that matter strange and contradiction? We must double check our current history. Then we find a historical fact that such kind of new war first occurred successfully by receiving a congratulatory telegram by the Pope, during war time, to the Americans domain Philippines in January 1944.

Key words: a Congratulatory Telegram by the Pope in 1944 to the Philippines Independence

1. はじめに

国家独立要件は、(1)「国家承認」である。第2次世界大戦前には、ヨーロッパ国際法は、西ヨーロッパの複数の列強国から「国家承認」を得る事が国家独立の絶対的な要件であるとして、慣習法的に規程していた。

- ① 1943年8月1日に英領ビルマが独立(バー・モウ Ba Maw 首相)した。満州国、中国国民政府(南京純正:汪兆銘政府)、タイ(8月1日)、イタリア(8月5日)、ドイツ、ブルガリア、クロアチア、スロバキア(8月6日)、日本が、独立ビルマを「ヨーロッパ国際法」に準拠して国家承認した。計9ヶ国である。ただし、他に、アルゼンチンが8月4日に、独立承認に近い「友好公電」を来電した。
- ② 1943年10月14日に米領フィリピンが独立(ホセ・P・ラウレル Jose・P・Laurel 大統領)した。日本、満州国、中国国民政府(同上)、タイ(10月29日)、ドイツ(10月16日)、イタリア(10月20日)、ビルマ(10月16日)、ブルガリア(10月14日)、クロアチア(10月16日)、スロバキア(10月21日)が国家承認した。計10ヶ国である。その「独立宣言」は世界27ヶ国に発信された。

* 国際関係論(環境科学科)教授 Inter National Relations (Department of Environmental Science, Professor

③スバス・チャンドラ・ボース (Subhas・C・Bose) が、1943年10月21日にシンガポールで自由インド仮政府の樹立宣言をした。これについて、日本(10月23日)、ビルマ国(10月24日)、フィリピン国(10月25日)、クロアチア国(10月27日)、ドイツ(10月28日)が国家承認を表明した。

ヨーロッパ列強国による国家承認は、A・A属領民にとって永遠に不可能な夢の様に思われていたが、東條英機首相は、こうして、その夢を「3国同盟」(40・9・27)の「枢軸国」の協力を得ながら、千載一遇の機会を利用して叶えたのであった。

他に、国家独立の十分な条件には、(2)中央銀行の設立(10・15フィリピン中央銀行設立)と、(3)実効支配する領土を守る国軍の創建、が不可欠である。日本は、42年7月、BDA軍(ビルマ防衛軍、後のビルマ国軍である)の建軍に着手した^[1]。

2. 2つの「東條ミッション」

スバス・チャンドラ・ボースの気概と裏腹の非力さを、誰も笑うことは許されない。東條首相にしても、一国の宰相として、日本の産業力、軍事力がアメリカに比して格段に見劣りすることを深刻に認識していた。しかし東條首相には、F・ルーズヴェルトと五角の勝負に持ち込める、とっておきの「秘策」があった。

43年8月に、東條首相はバチカンと直通無線通信回線を常設した。つまり東條は、ローマ法王(Pontifex Maximus)ピウス(ピオ)12世 Pius X II (エウジェーニオ・パチェルリ — イタリア人、39年に法王に選出)のバチカン市国(人口約4,000人)法王庁に、①英領ビルマ、②米領フィリピンへの「国家承認」を与えてくれる様に、手を回したのであった。先代のピウス11世が「満州国」を、ドイツ、イタリアに先んじて国家承認した事が絶大な影響力を及ぼした事を、かつて関東軍憲兵隊司令官(35・9・21～37・3・1)の経歴がある東條は記憶していた(ただし国内でキリスト教に対する残念な国家集中管理は、41・11・24実施宮内大臣通牒官発第608号に見る^[2])。

日・米両国はローマ法王の奪い合いを演じた。ピウス12世がそれを憂慮して取った措置は、ペトロ博物館 — それはバチカン市国の「外部」にあった — に法王庁「情報部」を移し、そこで「陳情」を自由交通で受け付ける事であった^[3]。大戦争動乱の世上から齎される「陳情」内容は、バチカンが「歴史史料」として責任保存する事に決まった。

山下奉文(やました・ともゆき)〈中將〉第25軍司令官は、42年2月15日にイギリス軍守備司令官・アーサー・パーシバル(Arthur Percival)中將を降し、シンガポール要塞攻略を完遂した。

一方42年4月25日、原田健(駐ヴィシー仏政府)参事官がバチカン駐在初代公使に任命された^[4](原田はバチカンでは「大使」の扱いを受けた)。5月9日に信任状を奉呈する。翌6日、アジア・太平洋戦局のミッドウェー海戦で、遥かに優勢な戦力を擁する日

本海軍は、レーダー探知技術の開発に遅れを取った為に米海軍機の待ち伏せ攻撃を受けて主力航空母艦4隻を撃沈され、アメリカは太平洋において制海権を奪った。

又一方、加瀬俊一（かせ・しゅんいち）が42年6月、特命全権大使（イタリア、スイス駐さつ）に就任した。加瀬は42年10月28日から駐伊臨時大使に任、そしてその後、43年4月27日から日高信六郎がローマに、駐伊全権大使に着任した。

43年1月、ルーズヴェルトとチャーチルは「カサブランカ会議」で「英領ビルマ」の奪回を誓い合った。同じ1月28日、東條首相は議会演説で英領ビルマの年内独立を約束した。2月4日、ガダルカナル島からの（日本軍）第2次撤退。同7日、英領インド独立運動の志士スバス・チャンドラ・ボースがドイツ・キール軍港から独潜水艦に乗船し、出港する。27日にシンガポールに着。4月18日、山本五十六GF司令長官がラバウル沖上空で墜落死した。これも米軍に暗号を解読され、前もって米軍機に待ち伏せされた上で撃墜されたのであった。

3月27日に「ビルマ方面軍」（河辺正三〈中将〉司令官）が新設されたが、「方面軍」を称してもその実体は僅か4ヶ師編成に過ぎず、他方日本軍を包囲して迫る「英領ビルマ植民地奪回混成軍」（連合軍）は、英米中（重慶）3ヶ国軍合せて12ヶ師になるので3倍の優勢であった。

ヨーロッパ戦局は43年1月、スターリングラード攻防戦でのヒットラー・ドイツ軍の大敗北で明けた。東條英機は、先代ローマ法王の志（共産主義による教会弾圧を許してはならない）を真摯に継いでいるピウス12世に対して、F・ルーズヴェルトが英領ビルマ（43・8・1）及び米領フィリピン（43・10・14）の「国家独立」を後戻りさせないように「歴史の証人」としてバチカン市国法王庁に協力して欲しい旨を訴えかけた。ハロルド・H・ティッツィマン・駐バチカン米国臨時代理大使との提訴競争を東條は仕掛けたのであった。

43年7月10日、D・アイゼンハワーは北アフリカから、3,000隻の艦艇に乗船させる16万人の米英（カナダ兵を含む）軍大部隊を率いてシシリー島に上陸した。米第7軍（ジョージ・パットン司令官）と英第8軍（バーナード・モントゴメリー司令官）である。この米英連合軍は、北アフリカ戦線で、「砂漠のキツネ」と異名をとるエルウィン・ロンメル独将軍が指揮する独伊枢軸軍をエル・アラメインの戦いで破る破竹の勢いであった。米英アングロ連合軍は、翌44年6月4日にローマに進駐した。翌5日、伊国王ビットリオ・エマヌエレ3世が退位した（1回目）。

ベニート・ムッソリーニ（Benito Mussolini）の失脚（43・7・25）に脅えたドイツ軍は、43年9月12日、独空挺落下傘部隊の働きによって、アペニン山脈中のグランサッソー山荘からそこに幽閉されていたムッソリーニを際どく救出し、一時期北、中部イタリアを占領した。ところが、10月13日には、バドリオ（Pietro Badoglio）元帥がファシスト大評議会の「グランディ（元・外相、駐英大使）動議」（7・24, 25）を大

義名分に掲げてクー・デターを実行し、その（南伊）新政府（国王一家とともに南伊ブリ
ンディジに移転）は、10月18日に対独宣戦を發布した。

麻のように乱れている政治模様を呈するローマを取り巻く政情の中で、全世界5億人の
カソリック教徒（コーカサス人種も含む）の信仰の頂点に立つローマ法王ピウス12世は、
英米軍の威嚇的砲門の先に身を晒されつつも、「アジア・太平洋戦争」における「国際法
と正義」に如何なる判断を下すのか？信徒ならずとも世界の人々はそれを注視した。

ピウス12世は、古式の長槍をささげ持つスイス近衛兵によって古めかしい警護を受け
ながら、バチカン宮殿3階の法王執務室に籠り、やせぎすの身の内に心中の苦痛をひた隠
しにしつつ、沈黙を守り続けていた^[5]。

戦時中のピウス12世の真の胸の内は、後になって1948年夏に、フランスのリオン
市で開催された仏カソリック「第34回社会週間」にジョバンニ・バッティスタ・モンテ
ィーニ・「バチカン市国」国務副長官（後のパウルス〈パウロ〉6世〈PaulusVI〉、63
ローマ法王に選出）から送られた手紙の中で間接的にはあるが表明されている^[6]。それ
は西ヨーロッパの地から発された魂を揺さ振る気高い内容である。

「近い将来に政策を一変すべき新事態が生まれるでしょう。責任重大な（欧米）強国は、
人間性の当然の要求である正義の社会進歩を勝ち取ろうとする（A・A）植民地属領の人々
の意志を、尊重せざるを得なくなるでしょう。植民地時代に（欧米の宗主国）は利己的、
物質的利益に動かされる事があまりにも多過ぎたのです。」

原田健・駐バチカン公使の1943年中の活動（「バチカン工作」）を「顕教」的外交
であるとすれば、東條はもう一本別に、「密教」的外交ルートを開拓した。原田には20
年以上に亘る国際連盟での職歴があり確かにヨーロッパ外交界の人脈が広がったが、有事
の「諜報外交」は原田（同志社大学総長・原田助の長男）に必ずしも向かなかった。

東條は「密教外交」の中心担当者に、「懐刀」の岡本清福（おかもと・きよとみ）少将
をシンガポールから選抜抽出して、double lineの開設仕事を岡本の働きに託した。

伶俐な頭脳を指して東條は「カミソリ東條」という渾名が有名であるが、東條のもう1
つの渾名は「軍部の『事務屋』」であった。ところで、東條は日米開戦時の首相でありな
がら、日本陸軍は「杉山参謀総長の陸軍」なのであった。そもそも日米戦争を引き出すこ
とになった「日中戦争」の発端（37・7・7）に溯っても、当時の杉山元（陸士12期）
は既に第1次近衛内閣陸相であり、他方東條（陸士17期）は関東軍参謀長だという地位
の開きであった（ただし、東條は38・5・30陸軍次官に任）。日米開戦後においても
その差は厳然と残っており、「作戦（軍令）」は一貫して杉山の領分であった。

しかし、「事務屋には事務屋の意地」がある。「事務屋の本領」とは、人脈関係を構築
する巧みな「根回し」（root binding）技術である。「バチカン人脈」に確かな「渡りをつ

ける」事こそが東條がF・ルーズヴェルトにも、はたまた杉山にも勝っている領分であり、それが東條流「アジア・太平洋戦争」戦略の「秘策中の秘策」であった。

岡本清福は、41年12月の日米開戦時には陸軍参謀本部第2部長（戦略情報分析）であった（41・4・1任）。岡本は、諜報、軍事情報分析分野の第一人者に他ならない。岡本少将はシンガポール（南方総軍）から呼び出されて、43年5月11日、東條首相から「大本营派遣伊独連絡使（節）」団長に任命された。同使節団の派遣は、42年10月3日大本营会議で決定している^[7]。団員は、陸軍の甲谷悦雄中佐（ブルガリア担当）、海軍の小野田捨二郎大佐（フランス担当）、外務省の与謝野秀（しげる）参事官（与謝野鉄幹の次男、母は与謝野晶子）等の総勢18人である。

岡本団長の一行は43年3月10日に東京を出発し、朝鮮、満州国、ソ連領（トルクシブ鉄道を南下）、トルコ、ブルガリア、ユーゴスラビア、ハンガリーという陸路経路で、ベルリンに4月13日に遙々到着した^[8]。

岡本はベルリンに到着すると直ちに先遣の3国同盟による日本側派遣軍事委員たち（小松光雄陸軍少将、横井忠雄海軍少将）、及び大島浩・駐独大使らと情報交換をしたが、それは専ら表向きのポーズが多分にあったと私には考えられる。尚、少し後の事になるが、大島大使は、同43年10月24日から11月1日にかけて、ドイツ軍が構築した「大西洋フランス沿岸防衛陣地」を視察してその内容を「外交暗号」電報（軍事暗号よりレヴェルが1級下）で東京の外務省に送ったが、それはアングロ連合軍によって解読されていたと考えなければならない。44年6月6日、(D-day)連合軍はノルマンディー上陸地点を決定する際に「大島情報」を十分に利用した事だろう。

岡本はそしてスイス首都ベルンに向かった。同地で出迎えた阪本瑞男・駐スイス公使は病に犯されていて、44年7月5日、ベルンで公務途中に死去している。中立国（ヨーロッパ中の軍事情報を集められる）・スイスのチューリッヒに岡本は借家住居を構えて、直ちに原田健・駐バチカン公使と連絡を取り始めた。原田公使の後ろ盾に加瀬俊一（かせ・しゅんいち）・前駐伊臨時大使（42・6～44・8）や、イタリア駐さつの日高信六郎・特命全権大使（43・4ローマ着任）がいた。

42年6月1日、吉田茂は、内大臣（40・6～）・木戸幸一（明治の元勳・木戸孝允の孫）に、「近衛（文麿・前首相）訪欧（スイスを想定）」による「条件講和」計画を打診していた。一方、スターリンの方は、翌43年10月19日モスクワで、（英米ソ3国外相会議のために）訪ソしたハル・米国務長官に対して、ドイツ敗戦「後」にソ連が対日参戦する意図を初めて明かした。又その他方で、上述した如く23日、日本政府は、自由インド仮政府を国家承認している。

43年半ばから44年いっぱいになる約1年半というかなり短い期間に、中立国・スイスを舞台にして、東條首相は重大な意味がある煮詰まった「情報外交戦」を展開する事に費やした。それがこの「原田、岡本工作」という**2つのミッション**であり、「戦後A・A

地域」の行く末を、必ずや左右する礎石になるのである。

さて、「東京裁判」（極東国際軍事裁判46・5～48・11）は、今後とも文明論の大きな研究テーマであり続けるだろう。判決文は、オーストラリア人のウェブ（William・F・Webb）裁判長が自分の頭の中で自由に「創作」したのではなく、予め強い政治的制約を受けていた。その目的を今日の歴史研究から洗い出すならば、ある特定の「史実」を歴史から隠蔽する事であったのである。ウェブの法理はその目的に沿って組み立てられている。その「史実」を、本稿は解き明かして行こうとする。

まずその判旨は、「世界支配のための独伊との共同謀議」を訴因5に掲げ、これが主たる骨格になっている。そして次に「1928～45年における侵略戦争の共同謀議」を訴因1に掲げるが、これが副たる骨格になっている。

訴因5を中心に据えるのは、「3国同盟」（40・9・27）の「犯罪性」を裁く事を目的としているが、それと同時に、或る「史実」を歴史から消し去ろうとする「東京裁判」法廷の意図があった。しかし、連合国際法廷の審理対象に「3国同盟」を引っ張り出さなければならないから、やむなく「連合」の結成以前に迄時期を溯り、訴因5を水増しする為に副次的な訴因1を導入する必要性が生じている。かくして、連合と日本の「アジア・太平洋戦争」に加え、満州事変と日中戦争も「共同謀議」による「一連の侵略行為」と判定して、審理対象に組み込んだのであった。

東京裁判法廷は、特に必ず日本1国のみを被告にして開廷されなければならなかった（46・10・1独「ニュールンベルグ裁判」最終判決）。もし日、独、伊3国の戦争指導者を一括して裁く国際法廷の場を設けたならば、「共同謀議（3国協議）」が存在しなかった事は勿論、アングロ連合国にとって極めて不都合な事である「**1本の重要な無線信**」の存在が、その審理の場で明らかになってしまうであろうからである。

東條英機首相が引き起こした「アジア・太平洋戦争」の主目的は、歴史を振り返ってみると、44年1月20日を以って一応の区切りが決着したといえるであろう。東條首相は、前43年6月16日帝国議会において同年中に米領フィリピンを独立させる事を公約し、同月26日に、「大本営・政府連絡会議」で、「比（フィリピン）島独立指導要綱」を策定した^[9]。

43年11月5、6両日、東京・国会議事堂では、東條首相の主催によって、日、満、中（南京純正）、タイ、独立ビルマ、独立フィリピンの6ヶ国が参加する「大東亜会議」が開催された^[10]。それゆえに以降における東條の政軍指導は、44年7月の失脚を待たずとも「戦争目的」をほぼ見失っているかに見える（43・6・19マリアナ沖海戦の敗北、43・7・7サイパン島陥落が、東條内閣を決定的に追い詰めた）。

東條は43年9月に、佐藤尚武・駐ソ大使（42・7クイビシエフ臨時疎開首都着任、43・8モスクワ着）を通じて、ヴェチェスラフ・モロトフ外相（外務人民委員）に、日本による「独ソ講和」の調停を申し出た^[11]。だが、43年11月からの「カイロ会談」

は、対日無条件降伏要求を決定している。この「第1講和交渉」ルートというべき対ソ「講和交渉」方式は、45年1月から重光葵外相（広田内閣当時に駐ソ大使を経験）とヤコブ・マリク（ソ連）駐日大使間の交渉に、6月からは、広田弘毅・マリク会談に移る。

43年1月のスターリングラード戦で、ソ連軍は初めて20万人のドイツ軍に対する攻勢に転じた。31日に独軍（パウルス司令官）が降伏した。東郷茂徳は東條のソ連への評価に異を唱えて42年9月に外相を外されている^[12]。しかし、東條が発案した「講和交渉」にソ連が耳を貸す筈は無かった。

一方、F・ルーズヴェルトは、43年5月12日に開いた「第3次米英会談」（暗号名トライデント〈3叉〉会談）で、その後の世界の命運を左右する、ある重大な「決定」を下した（神の他には誰もその決断が持つ重要性に気が付かなかっただろう）。

すなわちルーズヴェルトは、アングロ連合軍を、地中海・イタリアのシシリー島、サルジニア島（以上、「ハスキー作戦」43・9・9上陸、8・17作戦終了）以外には暫くは進軍させない、と決めたのだった^[13]。この決定によって、アングロ連合軍のローマ入城が、翌44年6月4日に引き延ばされる事になった。同日は、「ノルマンディー上陸（暗号名オーバーロード〈大君主〉）作戦」のD-day（6月5日）の前日である。

この引き延ばし作戦によって生じた「タイム・ラグ」が、バチカンに、自らの意志を貫こうと意思表示する時間を与える事になったのであった。

先んじて松岡洋右外相（第2次近衛内閣）は、「日・ソ中立条約」（41・4・13）を締結する折りに、その直前にさりげなくローマで、バチカン市国を訪問し、ローマ法王ピウス12世に謁見していた^[14]。同内閣に陸相であった東條は、松岡外相のこの外交指示から暗黙に学んでいた。

3. バチカン市国による米領フィリピン独立「国家承認」と米英による隠蔽

～1本の無線バチカン放送が決め手となった「アジア・太平洋倫理戦争」の決着～

1943年7月24日、イタリア王エマヌエル3世はムッソリーニの軍事統帥権を剥奪し翌日逮捕させた。これに反発してドイツ軍が越境侵入し、9月10日、ローマを含む北、中部イタリアは、ドイツ軍の占領するところになった。

ムッソリーニは9月5日、北イタリア・ガルダ湖畔のサロにイタリア社会共和国（ファシスト共和政府 — 以下、サロ政府と略称）を樹立した。日本政府は9月25日に、サロ政府を国家承認した^[15]。尚、それまで日高信六郎・駐イタリア大使は、ムッソリーニに付き従いながらイタリア北部山岳地域を転々と逃避行していた^[16]。

10月16日、ヨアヒム・リッペントロップ（Joachim・Von・Ribbentrop）独外相は公式コミュニケを以って、ドイツが米領フィリピン独立（43・10・14）を「国家承認」する事を内外に宣言した^[17]。サロ政府も同じく独立フィリピンの「国家承認」宣言を發したのは10月20日であったが、それはリッペントロップ外相がラーン・サロ政府外相

に強く促した事によるのである。

ソ連のスターリンは、「テヘラン」（イラン首都）に、43年11月28日にチャーチルとルーズヴェルトを呼び寄せて、ソ連の対日戦参戦時期を協議した。同地は、焦点のイタリアに限りなく近く、またそのアピールは、東條首相の「大東亜会議」（43・11・5, 11・6）の不都合なニュースを、世界のメディアから掻き消すのに恰好であった。東條が続けてローマ法王ピウス12世の生誕地であるローマでも、「大東亜（大使？）会議」を招集するのではないかと、アングロ連合は内心で戦々恐々と気を揉んでいた。しかしながら、43年末には、イタリア侵入ドイツSS（親衛隊）軍（カール・ウォルフ司令官）が、スイスを舞台に米軍と「休戦交渉」を始めていた^[18]。

44年1月ソ連軍がレニングラードで大攻勢を開始した。一方では、自由インド仮政府（チャンドラ・ボース）が、1月24日に対米英宣戦布告を発した（10・23日本政府による自由インド仮政府国家承認）。

19ヶ国の連合国外交官はバチカン市内の急作りアパート（裁判所を改装）に逼塞していた。又、ローマ市内に大使が住居を借りていたのは、枢軸国6ヶ国、そして中立国6ヶ国、その他3ヶ国（チリ、ベルギー、リトアニア）であった。44年1月、彼らのすべてがまさに「**歴史の証言者**」になろうとは！21日、バチカン市国法王庁が米領フィリピンを「国家承認」し、（グ）イリエルモ・ピアニ大司教をフィリピン派遣法王使節に決定した、というニュースが流れ渡ったのである^[19]。

このニュースの経路を後から追跡、分析すると、以下の如くであった。ホセ・P・ラウレル（Jose・P・Raurel）・独立フィリピン新大統領は人に知られる敬虔なカソリック教徒である。マラカニアン官邸でも大統領は毎日ミサを欠かしていない。ラウレル大統領は「独立建国式典」（43・10・14）の直後に、バチカン市国法王庁に宛ててアジアにおいて初の「**カソリック教国**」の独立国が誕生した事を報告した^[20]。

その通信手段は、「バチカン放送」と呼ばれる教会無線を使っていた。この間、「ヨーロッパ十字軍」を名乗るアイゼンハワーの第5軍は、サレルノ湾・ナポリとマンフレドニア湾フォッジオのライン以南の南部イタリアしか作戦視野に入れていなかった^[21]。アイゼンハワーは「ノルマンディー」作戦に忙殺されていたと見られる。

44年1月20日に「法王無線」によってマニラに「祝電」が「返電」として届いた事を、「ステファニ（カソリックの代表的教会音楽家 Agostino・teffani 1627～1693の名を冠したものか？）通信社」がベルリン、ローマで公表した。バチカン市の一角にはローマ法王専用の無線局があり、「バチカン放送」として知られている。それには世界各地のカソリック教会に回線が繋がっている^[22]。バチカン市国法王庁国務長官ルイジ・マリヨーネ（Luigi・Mogliione）枢機卿の名義で発送された「祝電」は、ジョバンニ・バッティスタ・モンティーニ国務長官代理（後のパウルス〈パウロ〉6世 Paulus V I 〈在位1963～1978〉）がローマ法王ピウス12世の意を帯して届けた「返電」であった。

ろう。

それは、オードスチー・マニラ大司教^[23]宛て「返電」だったと信じられる。尚、ここで思い出しておきたい事件がある。前にアルゼンチンが43年8月4日に英領ビルマを「国家承認」した時には、アングロ連合国はそれを「友好公電」に過ぎないとして揉み消す事に成功したのであった。

東條首相は44年1月23日の第84回帝国議会で、鶴見祐輔議員の質問に答える形で、ヨーロッパ・枢軸「3ヶ国会議」開催は「必要性が無い」と答弁した^[24]。東條は、「法王祝電」を受領した事でもう十分だ、と考えていたに違いなかった。日本国内では、日本基督教団のフィリピン「カソリック教国」への独立支援が、44年の「復活節」を期して発表された^[25]。

一方、アングロ連合軍のローマ侵攻がいきなり歩を速めた。44年1月21日、法王庁から東南30 kmのローマ法王離宮・カステル・ガンドルフォ (Castel・Gandolfo) 真裏のイタリア中部西海岸に乗り込んで来た。また、2月2日には、カステル・ガンドルフォ (ピウス12世がユダヤ避難民を保護収容中) 本体にアングロ空軍が警告爆撃を加えた。アングロ連合軍のローマ侵入は、先にも論じた様に、6月4日の事である。

溯って、先代のローマ法王のピウス11世は、34年に最初のフィリピン人大司教ルフィノ・J・サントスを任命していた。ところが、カソリック教にはスペイン王と取り決めた「通信規程 (pase regio)」の妨げがあり、それはアメリカが支配を引き継いだ後でも有効であったので、バチカンがそれ以上にフィリピンの状況に「介入」する事は困難であった。

さて、「報告電」に対するピウス12世の「返電」の趣旨は、「主観的」介入のレベルが先代と比べて変わっている訳ではない。しかし、「客観」国際情勢から、「祝電」は事実上は「国家承認」に当たるものになった。

それが Philippine Commonwealth (独立準備政府) への「不当干渉」であったかどうか？ その結論は、しかし既に歴史的に出ているといわなければならない。48年1月3日、フィリピン国内の「戦争裁判」において、ホセ・P・ラウレルが、フィリピン国民から戦時中のすべての公務行為について「完全無罪」の判決を受けた^[26]。

F・ルーズヴェルトは、アングロ連合軍がローマに入城するや間髪を入れずに、フランシス・スペルマン (Francis・J・Spellman) ニューヨーク大司教 (1946枢機卿) をローマ法王庁に差向けた。マイロン・C・テイラー・ルーズヴェルト特使 (前USスティール社長)、パターソン米陸軍次官らも、前後して何度も慌ただしく法王庁に飛び込んだ。尚、スペルマン特使は、45年6月頃、バチカン関係者とウィリアム・ドノバンOSS (42・6設立、CIAの前身機関) 長官の間に、「日米講和」へ向けた「第2ルート」を開拓している^[27]。又、「第3ルート」に「原田、岡本工作」が登場し、「ダレス (Allen・Wellsh・Dulles) 工作 (スイス駐さつ米公使特別顧問・弁護士の肩書きを名乗る。実はO

SSヨーロッパ総局長である)」として知られている^[28]。

8月23日、チャーチルがピウス12世に謁見を乞うた。しかし、「祝電」の撤回には応じてもらえなかった模様である。ピウス12世は、45年2月18日、最初の東洋人枢機卿・トマス田耕晔を誕生させた^[29]。アジア布教重視の断固たる決意を示している。

黒田重徳中将の後任に44年9月、山下奉文大将がフィリピン守備第14方面軍司令官に任ぜられて、10月6日にマニラに着任した。一方、マッカーサーはその3ヶ月後に、4ヶ師団174,000人の兵員を動員し、大輸送船団を率いてレイテ島に逆上陸した。420隻の大輸送船団は、314隻の艦艇（戦闘艦艇157隻、特務艦船157隻）に護衛されていた。Philippine Commonwealth の名目大統領マヌエル・ケソン（Mannuel・Quezon）がニューヨークで同年、客死していた為に、マッカーサーは代りに副大統領セルジオ・オスメニア（Sergio・Osmena）を自分に同行させた。

傀儡オスメニアを使って、プエルトリコ方式の「自治政府」をフィリピンに持ち込ませようと言うマッカーサーの考えが窺える。アメリカ政府が「マクダフィ＝タイディングス法」公約を修正を重ねて済し崩しにするかも知れなかった。また、マッカーサーの頭の中には、米大統領選挙が間近に近付いている米国紙の一面を自分の雄姿で飾り、肩章の星数を増やしたい、と言う欲望も潜んでいた^[30]。

「法王祝電」が齎すであろう情勢の変化に気が付いていた人物の1人は、多分、若き日のエドウィン・ライシャワー（Edwin・O・Reishawer 61～66駐日大使）だったのではあるまいか？ライシャワーは43年8月に米陸軍本部諜報部少佐になったばかりであり、日本関係の軍最高機密情報を取り扱っていた。いや、まだ忘れてはならない人物が他に3人指名出来る。それは米領フィリピン行政を熟知しているダグラス・マッカーサーであり、またホセ・P・ラウレル初代フィリピン大統領であり、そして最後に、ラウレルのバチカンとの関係を1番ラウレルの身近に接して見知っていた山下奉文将軍である。

マッカーサーは、日本敗戦によって東京に進駐すると、46年2月23日、何よりも焦って急がなければならないようにして、山下奉文・比島派遣軍司令官をマニラ郊外ロスパニョスで「戦犯」として絞首刑に処した。山下に対するマッカーサーの特別な憎悪の感情を特筆すべきである。その理由はアーサー・パーシバル（Arther・Percival）英中将のシンガポール失陥という失態の雪辱のみにあったのだろうか？

44年9月23日、ホセ・P・ラウレル比大統領が「対米英宣戦」を發布した。ラウレル大統領は「法王祝電」の庇護を確信していたと考えられる。溯っては1595年にマニラにカソリック「大司教区」が設立されてから、フィリピンはアジア最大のカソリック布教拠点であった。

東條内閣は44年7月17日に退陣しており、寺内寿一大将の南方総軍司令本部は11月に仏領サイゴン（40・7・11樹立ヴィシー政権下）に移転していた。45年2月、米軍がマニラ市内に逆上陸した。山下は、「マニラを戦場外とする」との信条を最初から

決断していた。山下は指揮下にある13万人の陸軍兵を率いて北部カラバロ山岳地帯（バギオ市、バヨンボン等）を中心に立て籠り、持久戦を終戦迄転戦したが、別軍令系統の2万人の海軍陸戦隊第31根拠地隊（岩淵三次海軍少将指揮：岩淵少将は市街戦の最終局面で自決した。海軍部隊は3月に市中から撤退）が「市街戦」を上陸米軍に挑んだ。

その結果、ワルシャワ攻防戦に次ぐといわれている悲惨な大市街戦がマニラ市内で展開された。大勢の無辜の地元市民が巻き込まれ、スペイン統治時代に建設された旧市街イントラムロス域内だけで数万人死亡したといわれている^[31]。又、破壊されたカソリック教会宗教文化遺産の数も計り知れなかった。“I have returned.”というマッカーサーの誇らしげな声だけが市内に空々しく轟いたのであった。

山下奉文は、44年1月20日の「法王祝電」、10月14日「独立建国1周年祭」、11月5、6日「大東亜会議1周年祭」の実施を以って、「アジア・太平洋戦争」の歴史的任務は十分に果たされた、と考えたであろう。「国家承認」がここ迄整う段階に到ったならば、「国家承認」の事実を今更転覆させる事は誰にも不可能である。アメリカがフィリピンというアジアの新属領の大橋頭堡を失えば、他の西欧宗主国は、広大な蘭領東インド（現インドネシア）を始めとするA・A植民地独立運動を再び圧伏しながら回帰して来る事が、最早出来ない、と山下には確信出来たに違いなかった。

やがて「日本占領期」に入ってGHQ帝王の座に君臨したマッカーサーは、自身がアイerland系米人であった為に、ローマ法王駐日使節（在位1939・9～1949・2）パオロ・マレラ（Paolo Morella）大司教（イタリア人）の私的代理であったブルーノ・ビーデル神父（ドイツ人）に、プライベートな悩みを何かと打ち明けて相談したが^[32]、マッカーサーはこの「法王祝電」のエピソードについては、51年4月11日にトルーマン大統領に突然解任されて帰国する日が来る迄、ブルーノにもついぞ一切口にしなかった。マッカーサーは「葉は落ち、しぼんだ花は散る」との言葉のみ残して日本を去った。

カソリック教会は「バチカン放送」受信局として機能する。同「祝電」は無線回線を通じて日本にも届いている。「祝電」と「原爆」が結び付いている事が証されるのは後の話になるが、81年2月に、ローマ法王ヨアンネス・パウルス（ヨハネ・パウロ）2世（在位1978・10・16～2005・4・2）がローマ法王として史上初めて訪日し、26日に長崎市の大浦天主堂と浦上天主堂を訪問した。両教会が、「法王祝電」の日本側受信キー局だったのである。

このポーランド人であるカロール・ヨゼフ・ヴォイティグは、ナチス圧政下に密かにクラコフ「地下神学校」で学び、クラコフ大司教区（アウシュビッツを管区に擁する）長を経てローマ法王に選出される^[33]という壮絶な個人歴史を持っている人物である。

長崎の大浦天主堂は、正式名称は「日本26聖人教会」である。1865年に竣工した。関東大震災で横浜天主堂が消失してから日本最古の天主堂であったが長崎原爆によって破壊した。また、浦上天主堂は、1885年着工、1914年完成。正式名称は「無原罪の

聖マリアの御孕（おんやどり）教会」である。200年以上にわたる日本キリスト教信仰の中で最も苛酷な迫害を受けた1つであったといわれる、明治初期の浦上4番崩れを被った信仰者たちの篤信の証（あかし）であった長崎大司教座聖堂である。これが原爆によって完全に破壊された。

4. 小結 — 牧野、吉田2代の目と東條流の自己始末

以上に叙述して来た経緯を、自分も駐イタリア大使（31・3・17～32・8・15）を経験したことがある吉田茂（吉田は駐イギリス大使〈36・6・24～38・10・19〉を務めた後、39年に外務省を引退する）ならば当然十分に知っていたらと推測する事が出来る。尚、吉田茂の養父の吉田健三（横浜の豪商：尚、吉田の実父は土佐自由党の政客・竹内綱）は、英ジャーディン・マジソン商会の初代日本人支配人だった人物である。

吉田茂はその影響もあってか？ジョン・ブル（英国紳士）が愛好する最高級ハバナ葉巻コロナを自分のトレード・マークにする程典型的「イギリスびいき」であることを、自他ともに認めていた。

吉田茂（1878～1967）は、又、明治の元勳・大久保利通の次男である牧野伸顕伯爵（39・4授与）（1987駐伊特命全権公使、第1次西園寺内閣文相、第2次西園寺内閣農商相、第1次山本権兵衛内閣外相、パリ講和条約日本全権団随員代表等を歴任する日本外交界の実力者）の長女（雪子）の女婿である。

牧野伸顕は、明治新政府の発足当初に実施された「岩倉遣米・欧使節」（通称・岩倉ミッション）に、父・大久保利通に付き添って12～13才の年齢で加わったが、米国に同使節が到着した折りに同地に1人で居残って米国東部フィラデルフィアに留学（ビークスキル幼年学校、マンチェスター・アカデミー）した。帰国（1874）後に牧野は、明治政府内の代表的な「アメリカ通」として内外に大いにその名を売った。

後に、外交界をちょうど引退中であつた吉田茂は、来るべき敗戦「後」の日本政治を睨んで、「戦後復興」の政治指導を担う事こそが自分の職分であると、恐らくは考えていた事だろう^[34]。吉田茂は36年に2・26事件後に誕生した広田弘毅内閣の外相候補として推されていたが、親米派の牧野伸顕の女婿であるので軍部が吉田の外相就任に反対した為その話は立ち消えた^[35]。その後吉田は、日中戦争へ介入度を深める軍部と距離を取り続けたのであつた（又、牧野伸顕〈1861～1949〉は、2・26事件で前・内大臣〈25・3～35・12〉だったという理由で襲撃を受けた〈湯河原伊藤旅館に逗留中〉が、軽傷で済んだという対軍関係の経歴を持っている）。

こうして牧野と吉田の「義理の親子」は、奇しくも2代続けて対イタリア外交と太い絆を持っていた事を我々は記憶に留めておかなければならない。2人は「3国同盟」（40・9・27：第2次近衛内閣）以降から、日本とバチカンとの関係を注視し続けていた事であ

ろう。

岡本清福は43年10月29日、中將に昇格していた。45年8月15日の日本敗戦日に、岡本清福中將は美しいチューリッヒ湖を望む寄宿先のアパート2階の自室で、壮烈な拳銃自決を遂げた。

自殺の直接の理由は、岡本が開戦時に戦略情報分析責任者を担当していたことである。後には2通の遺書が残されていた。1通は梅津美治郎・参謀総長宛ての事務的な、割にソック無い任務始末書であり（チューリッヒからソ連参戦が近いと警鐘を打ったのに、梅津が握り潰した、と岡本は考えていた — 尚、39年「ノモンハン事件」の後に、梅津は関東軍司令官〈39・9・7任〉、岡本はキ下連隊長の関係であった）、もう1通は桜井一郎大佐（44年3月16日スイス公使館付き武官室がスイス首都ベルンに設立〈武官代理・沼田英治少将〉され、桜井大佐は筆頭技術駐在官）宛てになっていた。しかし、その遺書の内容は、加瀬（駐スイス・ベルン）公使（44・8・25任）に宛てたものである。加瀬公使が今迄岡本に与えた「バチカン工作」に対する陰の部分での支援に対して、岡本が深謝したものに他ならないだろう。

45年9月11日、東條英機の自殺失敗（翌12日、杉山元・元参謀総長が自決）が、日本歴史上の謎として残っている。9月13日に占領軍の命令で旧・日本軍大本營が廃止になるから、東條は開戦の最高責任者として責任を全うしようとしたのであったが、手練れの東條がなぜ拳銃自決に失敗したのであろうか？そして、東條は、翌46年5月3日、「極東国際軍事裁判」（東京裁判）への出廷に応じた。

被告・東條英機が「東京裁判」で天皇に「戦争責任」が及ばないように懸命に論陣を張ったこと（ジョセフ・キーナン Joseph・Keenan 主席検事も、46年6月、47年10月に天皇を訴追する意志が米側に無い事を公的に表明した）は、日米ともに歴史解釈として定着している。しかしもう1つ、東條が「東京裁判」に主体的に係わろうとした目的がある。東條は「東京裁判」を通じて、逆に、「バチカン工作」の総てが、歴史にその事実が存在していないかの様に、法廷で「完全黙秘」を貫き通したのであった。

東條の行為は、戦時中にバチカンが、A・A被植民地の独立運動に対して、連合国に不従順でありながらも積極的な支持態度を敢えて鮮明化しなかった（「受難者」へのローマ法王の）「道義的責任」論を、身を以って斥け、バチカンを徹底的に庇い抜いたのだ、と歴史的に分析出来るのである。

ピウス12世へ「宗教者としての倫理責任」が及ばないように、東條は国際法廷の場で、ヨーロッパ法上の「一事不再理」を確定させた。この行為は、ひいては、「戦後」の国際秩序混乱期を利用して、よしんば旧・宗主国がA・A植民地にもう1度回帰しようと企んでも — 実際歴史はそうなりかけたのだが — ，バチカン市国法王庁の手に、新興A・A独立国へ「国家承認」を与えるという決定的な「カード（切り札）」を保留し続けさせることになったのであった。

バチカン市国のヨーロッパ権威国家としての存在は、当面英米を牽制し、脅かし続けるのであった。以上の2つの目的を達成しようとするれば、東條は「2度死ぬ」(only die twice) 必要があり、48年12月23日に、東條は東京巢鴨拘置署内で「処刑死」を従容と受け入れた。それは裁かれてではなく、裁かせる為にてであった。

注

- [1] 武島良成『日本占領とビルマ民族運動』龍溪書舎，2003年，222頁。
- [2] 原誠『国家を超えられなかった教会』15年戦争下の日本プロテスタント教会，日本キリスト教団出版局，2005年，135頁。
- [3] ラッツァリエ『パウロ6世』ヘンデル代理店エンデレ書店，1963年，6157頁。
- [4] 金山政英『誰も書かなかったバチカン』サンケイ出版，1980年，14頁。
- [5] 大澤武男『ローマ教皇とナチス』文春新書，2004年。
- [6] 『パウロ6世』前掲書，64頁。
- [7] 田々宮英太郎『大東亜戦争始末記』経済往来社，1966年，110頁。
- [8] 同書，111頁。
- [9] 『大本営陸軍部』(6)，防衛庁防衛研修所戦史室，朝雲新聞社，1973年，548頁。
- [10] 判澤純太『日中戦争の金融と軍事』信山社，2008年，249-251，281-283頁。
- [11] 加瀬俊一(かせ・としかず)『加瀬俊一回想録』(下)，山手書房，1986年，15頁。尚，かせ・としかずは，本稿のかせ・しゅんいち駐スイス公使とは別人である。かせ・としかずは，43外務大臣秘書官，44貴族院書記官，45大東亜大臣秘書官等。尚，この東條の申し出は，ムッソリーニ総統(ドーチェ)から日高駐伊大使を通じて東條への依頼が背景にあった(ラケーレ・ムッソリーニ『素顔の独裁者・わが夫ムッソリーニ』角川書店，1980年，248頁)。
- [12] 『東郷茂徳手記』原書房，1967年，312頁。
- [13] 『大本営陸軍部』(6)，前掲書，553頁。
- [14] 同書，384頁。
- [15] 『官報』。
- [16] 日高信六郎『朝の山残照の山』二見書房，1969年，338頁。
- [17] 『日本外交文書』太平洋戦争，第2冊，外務省，2010年，1414頁。
- [18] 与謝野秀『縁なし時計』采花書房，1948年，101頁。
- [19] 1943年1月21日『東京朝日新聞』(夕)，同『毎日新聞』(夕)
- [20] 1944年1月16日『日本カトリック新聞』
- [21] D・アイゼンハワー『ヨーロッパ十字軍』朝日新聞社，1949年，188頁。

- [22]原田和歌子『原田健遺稿集』（私家版）1974年，80頁。
- [23]福島慎太郎編『村田省蔵（元・駐フィリピン大使）遺稿・比島日記』原書房，1969年263頁。
- [24]『帝国議会衆議院委員会議録』昭和編，149，1999年。
- [25]『日本基督教団史資料集』第2巻，日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室，1998年，316－326頁。
- [26]『ホセ・P・ラウレル博士戦争回顧録』日本教育新聞社，1987年，189頁。
- [27]『原田健遺稿集』前掲書，310頁。
- [28]「大東亜戦争関係一件・スウェーデン，スイス，バチカン等ニオケル終戦工作関係」外務省外交史料館A700-9-66
- [29]『カトリック大辞典』富山房，1954年。
- [30]『ルーズベルト秘録』（下），産経新聞社，2000年，256頁。
- [31]村尾国土『比島決戦』フットワーク出版，1992年，167頁。
- [32]朝日ソノラマ編集部『マッカーサーの涙』朝日ソノラマ社，1973年，138頁。
- [33]『新カトリック大事典』上智学院新カトリック大事典編纂委員会，2009年。
- [34]以下のエピソードは吉田茂の人柄を語る上で引用されるエピソードである。

敗戦によって日本国民が飢餓一步手前に追い込まれていた頃，吉田茂首相（46・5・22組閣）はGHQのマッカーサーに450万tの緊急食糧援助実施を掛け合い，マッカーサーは結局70万tの援助に応じた。そしてその後，マッカーサーは吉田に，「自分は70万tしか日本に渡さなかったが日本に餓死者は出なかった。日本政府の統計はいいかげんで困る」と文句を言った。すると吉田はすかさずマッカーサーにこう切り返した。「当然でしょ。もし日本の統計が正確であったら，むちゃくちゃな戦争はいたしませんでしたヨ。また，正確であったら，日本は大勝利の勝ちイクサだった筈です」。その答えを聞いてマッカーサーは腹を抱えて笑った（麻生太郎『祖父・吉田茂の流儀』PHP研究所，2000年，33頁）。

このエピソードは，GHQ（連合国最高司令官総司令部）の独裁者マッカーサーに対するふてぶてしい吉田の態度を余すところ無く描いている。あまりにも有名な話なので，孫の麻生太郎もさすがに省かない。しかし吉田は，なぜマッカーサーにこうも大胆不敵に大口（big mouth）を叩くことが出来たのだろうか？

吉田茂の戦前の外交官としてのキャリアーは，田中，浜口両内閣の外務次官，イタリア大使，イギリス大使である。大使時代には，若槻礼次郎（第2次），犬養毅，

齋藤実（以上、イタリア大使時代）、広田弘毅、林漏十郎、近衛文麿（第1次）（以上、イギリス大使時代）の歴代内閣に仕えている。

吉田はイタリア大使時代に築いた外交人脈を通じて東條が起死回生を狙って仕掛けた「バチカン工作」の詳細を知っていたら、一方、マッカーサーにもその事（吉田がそれを承知している事）は分かっており、かつマッカーサーは、吉田がその事実を、ピウス12世の立場を慮って、歴史から秘匿し続ける覚悟でいることも察していたと思われるのである。

かくして、両人は、キリスト教的価値観に係わる「受難民」の「救済」問題について心理的な駆け引きを繰り広げて対峙した。その上に、吉田の例のジョークも生まれ、又、吉田は、マッカーサーの占領治政下に、ひいては済し崩し的に、所謂「吉田ドクトリン」政策を遂行して行くことが可能であった、と解釈すべきかも知れないのである。

しかしながら、聖公会（エピスコバル：英国国教会系統）派キリスト教の敬虔な信仰者であり、主観的には偽善を忌み嫌うダグラス・マッカーサーは、吉田の存在を常に真近に見れば、バチカンのピウス12世の考え方に潜在的にそぐわない「占領者」の自分に改めて気付き始めた様子であり、内々では次第に、「太平洋戦争(The Pacific War：アメリカ側の「アジア・太平洋戦争」〈大東亜戦争〉に対する用語)は、日本の（侵略戦争ではなく）自衛戦争である」との言葉を周囲の人々に漏らしている。だがそれは、戦後、A・A植民地への旧・宗主国復帰に心底では必ずしも徹底反対しない逡巡的米・トルーマン政権にとっては、極めて不都合で、厄介な事だったのである。

51年4月、マッカーサーは日本を去った。

[35] 『祖父・吉田茂の流儀』同書、159頁。